

令和6年度第1回文化芸術に関する意見交換会

- | | |
|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 日 時 | 令和6年11月21日(木) 14時00分～16時00分 |
| 2 会 場 | ときわ会館5階 502会議室 |
| 3 出席者
(敬称略・五十音順) | (1) 委員
新井久夫、小林桂子、雑賀吉人、嶋岡正充、代田一貴、関井一夫、高見澤妙子、坪内間、遠山昇司、村上和夫、村田行雄、山口哲生
(2) 事務局
スポーツ文化局 鶴田局長、川田部長
文化政策室 原田室長
(3) 欠席者
永井伸英、松本正 |
| 4 公開・非公開の別 | 公 開 |
| 5 傍聴人の数 | 1人 |
| 6 内容 | (1) 開 会
(2) 委嘱状交付
(3) 挨 拶 (スポーツ文化局長)
(4) 委員紹介
(5) 事務局紹介
(6) 委員長・副委員長選任
(7) 報告・意見交換内容
①さいたま市文化芸術都市創造計画の令和5年度の施策状況について
②さいたま市のこれからのアート活動
③その他
(8) その他
(9) 閉会 |

会議記録

- (1) 開会
- (2) 委嘱状交付
- (3) 挨拶（スポーツ文化局長）
- (4) 委員紹介
- (5) 事務局紹介
- (6) 委員長・副委員長選任
- (7) 報告・意見交換内容

<① さいたま市文化芸術都市創造計画の令和5年度の施策状況について>

○村上委員長

去年は、芸術祭について皆さんで議論して、多くの方がよかった、面白かったという意見があった。そこで、芸術祭がよかったという評価、意見が多かったとのまとめを会として出した。それは、文化政策室としてはどうだったか。

○事務局

昨年度国際芸術祭を開催し、3回目ということで最も多くの方にご来場いただき、ご好評いただいた。国際芸術祭のやり方のアイデアのほか、来年大宮盆栽村が100周年を迎えるため、国際芸術祭以外についてもご意見をいただいております、有意義であったと考えている。

○村上委員長

振り返ってみると、去年のこの会においてはいろいろな意見が出た。全体としてはすごく面白かった。中心施設が旧市民会館おおみやで、立地もよかったし、それから規模が大きかった。委員のほとんどの方が足を運んでおられたし、インパクトも大きかった。

ただ、もう少し企業経営、商品開発的な視点からの議論もあったほうがいいのではないかという意見もあった。

ただ、同じような芸術祭の中では、芸術と市民が近づいたと感じられた。芸術はよくわからないという意見がよく出るが、芸術は意外と身近にあるものだ、といった芸術との触れ合いの価値というものがあって、市民の皆さんに好感を持たれていた。それを委員の方もご覧になって、良い芸術祭だと感じたのだろうと思う。

<②さいたま市のこれからのアート活動>

○村上委員長

これまでの意見交換会では、先ほど報告があった「さいたま市文化芸術都市創造計画」を作るという仕事があり、この会において委員から自由な意見をいただくことが重要だった。そしてアーツカウンシルの話があり、去年は芸術祭の意見交換をした。

ところが今年は、本当に純粋に意見交換会をするという年になった。

例えば、次の計画はどうかとか、或いは施設を作らなければいけないのでどうするかとか、ご相談をして、それに意見をいただくというテーマがない。純粋に、このさいたま市の文化芸術の今後について、意見をいただくことが今回の会の趣旨である。実は、余りにも漠然としていて、普通の人はそう聞かれても困ってしまう。漠然とした美しいものがもっとまちに増えたらいい、そのようなお話をされるのが普通だろうと思う。そのため、進め方を考え、さいたま市の将来像というのを、これから私が簡単にお話しするので、それを頭に置いていただき、分野アートの在り方について意見交換することとしたい。実はさいたま市のホームページをめくっていると、将来像、例えば、人口がどうなるかとか、産業がどうなるのかとか、そのようなこ

との推計などが出ている。

まず、それを要約して、さいたま市が今後どうなっていくのか、ということをお話しするので、そのことを頭に置いていただいて、最近、皆さんが、経験されたアートイベント、或いはアートの活動、或いはまちのなかのアート、或いは自分の知っている芸術家がこんなことをした、例えばゲームの作り手だとか、それからゲームを使って競争するeスポーツ選手なども含まれる。それから、まちの中で、繁華街に何か新しいサインができた、そのようなお話でもいいので、芸術的な動きでさいたま市の将来と結びつく可能性がありそうだという事例を2つ、3つ挙げていただいて、それを最後にまとめて、そしてそこからもう1回フィードバックして、この計画をよくする為に、こんなところに力を入れたら、もっとさいたま市の文化芸術は良くなるのではないかと、というようなお話を、最後にもう1回皆さんにさせていただきたい。日常的にそれぞれの家に、盆栽があるようにしたら、そしてそれを基礎にイベントをしたらいいのではないかと、例えばそんな話をさせていただいて、皆さんの意見をお聞きしたい。

それでは、さいたま市のこれからの町のイメージのお話をしたいと思う。

なぜ、このような話からスタートするかというと、日本のビジネス、或いは産業といったものを取り上げる際、一番大きな課題となるのは、人口減少であり、これからの地域文化の発展や、さいたま市のような新しい都市におけるアート活動の促進にも大きな影響を与える条件と考えられるからである。

さいたま市では今後50年、人口がそれほど減らない区が2つある。それは中央区と浦和区で、大宮区は人口が減る。その他の区も、人口が減ってしまう。そのため、さいたま市自身は50年後には少し人口が減っている。それでも他の県の県庁所在地と比較すると、さいたま市は安定して人口が推移していく。日本全体の人口を考えると、50年後は人口の25%が減り、4人に1人いなくなる。働き手はどうかというと、生産年齢人口は33%減る。つまり人口の減少以上に働く人の数の減少が甚だしく、3人のうち2人しか残らないのである。今、さいたま市を見ていて、そのような状況があと50年後には訪れる。

そういうときに、どうやって生きていくかという経済の話も大切だが、働かない人たちも多くなる私たちの生活というのは、どうやったらもっと豊かになるかと考えるときに、その豊かさを創り出すものというのは、実は文化や芸術と考えられよう。今まで、それは商品の一部でしかなくて、買うというものだったかもしれないが、50年経った時、人口が減り、そして経済的にも、そこまで落ち込んではいないが、豊かでもないという状況になったとき、我々は、文化や芸術を創り出して、創り出したもので、暮らしを豊かにする、そういう世の中になっているに違いない。特にさいたま市は、生産力が多少落ちてもそれほど人口や経済力が今とそう変わらない。

一方で、世の中は非常な勢いでデジタル化が進んでいくため、我々の周りには、様々なものがデジタル化されていく。少なくとも手でやっていたものは、かなりのところがデジタル化されていく。アートというのは、デジタル化に対抗するもの。デジタル化が進めば進むほど、不思議なことにみんな自分で絵を書きたくなるし、デジタル化が進めば進むほど、みんなは自分で話を作って隣の人を笑わそうと思う。そういう意味では、デジタル化の進行は、実はもう片方で、エンターテインメント、人と人との関係をよりリアルに充実させていく、そのような動きが生まれるはず。さいたま市も何年か経ったときに、もしかしたら文化活動やアートの活動はすごく変わっていて、それはものすごい勢いで伸びているという可能性がある。

そうなる、さいたま市はどんなまちになっていくだろう。そこに繋がっていくような、今の私たちの経験、アートや文化の経験で、どのようなものがあるのかということ、皆さんで少し話したいと思う。

私は1週間ほど前、東京駅近くにある、デジタルアートギャラリーのようなところに行ってきた

た。どのような場所かという、ほとんどが画面で構成されている施設であった。大体美術展に行くと、インスタレーションのようなものがあれば、或いは絵もあつたりするが、そこはデジタル画面しかないという設えになっている。これは我々が知っている美術展や、美術館やそういうもののどちらでもない。部屋の中に突然イメージが現れ、我々はそのイメージの中に、没入体験する。さらにすごいのは、画面の脇から風が出てきて、においがついているため、デジタルの画面を見ている、森が動いているように感じる、そういう体験ができる施設であった。

私が最近様々なイベントを経験したが、ショックだったことがある。それは、知り合いの方から、「墨で字を書いた。その展示が近所の公民館であるから観に来てほしい。」と言われ、習字をイメージして観に行った。するとレタリングみたいな字が墨で書かれていて、これはすごいな、とショックを受けた。しかし、その経験を基に考えてみると、それを超えて、テクノロジーが、すごい状態を創り出しているのである。だとすれば、これがアートと結びつくことによって、我々の空間はさらにすごく変わると思った。それがデジタルアートギャラリーだった。

例えば自分の家の壁に、内側に向けてテレビがあつて、皆で勉強したりテレビを見たりするのではなくて、その逆に、家の外側に大きなテレビがあれば、道を歩いている人たちがそのテレビ画面を見るときに、そのようなことが起こるだろう。

そうすると、私の家の近所はほとんど白い家ばかりだが、白い家だからこそ、隣の家に投影して、そして町がものすごく個性のあるまちに変わっていく。そのようなことが可能なんじゃないかと思った。

そうすると、今日は太田窪でやっているから行ってみようとか、明日は原山でやっている、その次は、日進でやっていて、これにはおまけが付いていくじ引きができるらしいとか、その次は常盤でやっていて、みんなで踊れるらしい、そのようなことがこれから起こるのだろう。残念ながら先ほどのデジタルアートギャラリーの技術はまだテクノロジーの段階のため、今私がお話したようにそれを使いながらまちづくりをしていく、そして文化を増やしていくというのは、おそらく10年ぐらい経つとそういう時代になるのではないかと思っている。

そういう意味では、50年後のさいたま市の文化やアートというものを、新しく思い描こうとする機会を与えてくれたというふうに私は感じた。ちょっと話が難しかったかもしれないが、最近見たもので、これは、さいたま市を変えるようになるかもしれない発見をした、ということがあれば、お話いただけないか。

どうぞ、小林委員。

○小林委員

デジタルの話が出たためお伝えすると、今、VRやAR、AIが話題になっていると思うが、大体20年周期でブームが来ている。AIだと、20年周期で3回、VRも同じくらい、現在のものも何回目かのものが来たと思うが、今話題に挙がった大画面で文化財を見るとか、空間を作るということも数度目かのブームである。しかし、現在の技術で機器はよくなっていて、中国の上海や深センに行くと、ビルの壁そのものがLEDパネルになっている。プロジェクションマッピングを使わなくても、隣近所のビルと連携して、大きな画像が映るということは、もう5、6年前から普通にあったため、資金があれば可能と思われる。

しかし、地方自治体がデジタル化を担う人材を作るための学校が、20数年前に地方に開校したが、そういった設備を作る・スペースを作るというところに何億ものお金がかかっている、実際にそこで学んだ人間が、産業としてその地域に返せるかということ、とてもそんなお金を稼ぎ出すのは難しいと思っている。

村上委員長のお話で、将来的にデジタル技術を使ったものがどんなふうに残っていけるのかと考えると、実はアートそのものというよりは、我々がすでにグーグルマップなどスマートフォンのアプリで行っているようなことが、何十年も前の人からすると、アートに近いようなことなのではないかと思う。どちらかという、表現技術として考えるというよりは、デジタル技術が文化芸術を続けていくためのプラットフォームになればと考えた。

先日、「すみだ向島EXPO」という芸術祭に行った。まちなかで、100年前の長屋を整備したものが何軒もあり、商店街とまちなかがセットで、アーティストが展示をするような、非常にささやかなイベントだが、これが面白かった理由は、自治体が計画をするときには、前年比何%そこに参加する人が増えたか、そういう指標の立場があるが、すみだ向島EXPOの場合は、全部運営を手弁当でやっている。そのため、チケット代とグッズで、全部やらなければいけない。収支が均衡することを目指して活動する。逆に言うと、その労力が見合えば、来年も開催できるということになる。

自治体からの補助金があるという形も重要かと思うが、「根付く」というのは、自主的にやるということが必要で、自治体が、こういう事業があるのでそれに参画というのは当然いいことではあるけれども、例えば50年後もそうしたものがあるとすれば、その土地の人が自力で続けていくということが一番大きいと考えた。

もう1点、最近、金沢で行われている発酵文化芸術祭に行った。参加しているアーティストは海外や東京の方もいて、発酵蔵と呼ばれるところで展示をするなど、「発酵」をテーマに芸術祭が作られている。まちづくりという意味で面白かったのが、港側の大野という地区は、しょうゆ蔵が並んでいる地区であり、古い建物が並んでいるが、建物や街並みが整備されている印象を受けた。お金を持っている人が多く、古い家を一定の美意識でキープしている、ということ。すでに人が集まるカフェなどもある。そのプラットフォームに発酵文化芸術祭が乗っているため、展示も楽しめるし、訪れた人達も楽しめる。そしてその場所に迷惑をかけている感じがなく、生業に迷惑をかけていない感じというのが、私が様々な芸術祭に行った感覚の中で、すごく新しいと思った。きちんとした生業があるところに、また別の角度で人が訪れる機会、展示がつながる、さらにITが関わることで行きやすくなる、わかりやすくなるということが作れたらと考えた。

○村上委員長

ありがとうございました。

デジタルの話、もう1つは自分が持っている資産を活用しながら、まちづくりするというお話。

この発酵の話も面白いが、お金のある人が自分の持っている資産を使いながら、新たなまちづくりの機会をつくり出していく、その話はさいたま市でも、もしかしたらできるかもしれない。

ただ、複数の家を持ったり、かなり大きな住宅地を持ったりしてそこに住んでいるという人は減ってきていて、今お話があったようなことができる場所が減ってきている。しかし、例えば、通船堀のあたりなどは可能性としてはあるので、多少広い土地、いくつかの不動産を持っている人が活躍できる機会が出てきたということを感じている。

どうもありがとうございました。

その他、こんな不思議なことを私は最近経験して、これは面白かったというアート経験はあるか。

自然が何かを作り出すものではなく、人工的に物を作り出すということがアートの基本。一方で、自然に頼りながら作っていくというのが自然環境保存。その区別をしながら、こんな面白

い経験をしたということがあれば。

○新井委員

私は家業で伝統的な雛人形を中心に作っていて、組合でギフトショーに出店しようということになり、技法だけ使って、新たなものを作るということで、だるまと招き猫を西洋風のコットンを着せて出してみた。すると結構目を引いて、通常は人形業界の間屋が引き合いをしてくれるが、全く違うところで、セレクトショップとか、特にインバウンド関係のお店をやっているところが引き合いをしてくれた。そして、いくらで売るかという話になったときに、たくさん買ってもらうため、ぎりぎり安く提案しようとするが、しっかり取らなきゃ駄目だ、という声が上がった。やはりいいものを作って、その労力の分をきちんといただくということが大事なのかなと感じた。

○村上委員長

ものすごく面白い。

テクノロジーは人形のものが生きていて、それからアートの表現では、今のものが入っている。それはたくさん売れたのか。

○新井委員

経験的には多かった。

○村上委員長

岩槻では他にも面白い事例があり、岩槻にある菓子店が、地元の商業高校に和菓子のデザインを依頼した。すると、商業高校の生徒たちが、グローブのデザインをした饅頭か何か、そこに人の顔か何かの焼き印をして、商品にした。始めのうちは岩槻で売っていたが、それを大宮の百貨店に持っていったところ、すごく喜んで売ってくれたというようなことがあって、伝統的な技術と、新しいアイデアを組み合わせるということをやっていた。岩槻はそういうことをやる方が結構いる。

それは一軒でやるのか、分業するのか。

○新井委員

基本的に人形作りは分業。

岩槻の商業高校は、伝統文化の学習をしようという学校で、地元と工業を結ぶということをやっている。

○村上委員長

ありがとうございます。

関井委員はいかがか。

○関井委員

自分の制作をやっているとそちらを引きずってしまって、意外と外を見て回ることがない。強いて言うならば、NHKでやっていた、コミックや文学から出てきたアニメを趣味で見ている。

○村上委員長

学校で教えていて、学生たちの不思議なアートに出会ったりしないか。

○関井委員

もしかすると、作り手のほうが、今は硬直化しているという感じがしている。美大の学生と一般の大学の学生で違いはあるが、学生たちを普段見ていると、情報を得てきて、それに則ってやろうとする傾向がある。例えば、今はこんなものが流行っているからそんなものを作るとか、明治の技巧の作品、そういうものが海外に出たり、アートイベントに出たりすると、みんなそちらに流れていく、そういう傾向に見えてしまい、なかなか特異なアイデアを生み出すという学生は多くはない。そうすると、アートに関わっていない人のほうが面白い発想をするという感覚が少しある。

○村上委員長

ありがとうございました。
次に、高見澤委員。

○高見澤委員

漫画会館には、北沢楽天の作品だけではなく、歴史的な資料や、貴重な資料がたくさんある。そういうものをこれからどのようにして残していくか、伝えていくかということの難しさを日々感じている。個人的には北沢楽天の日記などを拾い出して、資料と照合していくという作業を、地道にやっている。

そういう中で、漫画会館は出来て既に50年経ており、盆栽、人形、鉄道に比べると、今トーンダウンしていると感じている。ただ、世界的には日本の漫画というと、かなり注目度が高く、実際、漫画研究されている方たちからは注目されている。ここ何年か前に、北沢楽天のデビュー作品がドイツのハンブルク図書館というところで見つかった。それは、近代漫画の研究者が世界中の図書館、美術館のデータをコツコツと検索して見つかり、私たちも目にすることができた。今のお話とは少し違うかもしれないが、漫画会館の資料の、例えば、市内にたくさんある施設の資料が、果たして、皆さんに知っていただけているかどうか。どういうものが実際にあって、見たい人が見ることができるという形になるのが、一番だと思っている。これから先50年、今の漫画会館の姿が、50年後の人形博物館や盆栽美術館ということにならないために、今、きちんとそういうことを考えていかなければならないと感じている。

デジタル化データの公開というのは、もちろん漫画会館単独でできることではなく、文化芸術都市創造計画の体系の中で言うと、歴史文化資源の保存、継承活動に繋がると思うが、市全体として、これからそういった方向性を考えていく必要がある時期だと感じている。

○村上委員長

わかりました。
楽天先生のお書きになった漫画の中で、高見澤委員が一番気に入っている漫画はあるか。

○高見澤委員

例えば、「雷と蛙」という作品があるが、日常生活の中にある、ユーモアとか、面白さ、ふつと笑ってしまうような、そういったエッセンスが楽天の面白さだと思っており、決してそれは古いものではなく、今の私達にも繋がっており、うまく持っていけば、面白さを感じていただけたらと思う。

○村上委員長

例えばドネーションして、デジタル化しようというときに、人々の関心を引くようなものはあるか。

○高見澤委員

大宮にRaiBoC Hallが開館し、名前の由来が漫画、鉄道、盆栽となっているため、例えば施設の中にそういったエッセンスを常に紹介できるところができたらと思っている。

○村上委員長

次の店舗が入るまでのスペースを貸してもらおうといった働きかけをしないのか。

○高見澤委員

なかなか実現は難しい。

○村上委員長

小林委員に何うが、今のお話のような、データがあって、まだデジタル化されていないものを、デジタル化して、それを活用するというのは、現在ではそれほど難しい仕事ではないと思うが。

○小林委員

文化庁では漫画、アニメ、ゲーム、デジタルアート、映画をメディア芸術と法律で定めていて、メディア芸術データベースというものを整備している。そこにデジタイズしてアップするための補助金がある。補助金は他にもあるかもしれないため、そういったものを活用いただきたい。一旦デジタイズされていれば、展開はいろいろと考えられるため、ぜひご検討いただきたい。

○村上委員長

ありがとうございました。

デジタル化すると、さいたま市の資源としていろいろ使えるかもしれない。

悲観的になるよりも、何が面白いかというところに着目しながら、10年ぐらい先を考えていくことがいいと思う。

次に、鉄道はどうか。

○坪内委員

鉄道のデジタル化というと、一両全部をデジタル化するのは無理だと言われていたが、最近ARで位置情報を使い、何もない展示に端末を通すと、鉄道が復元して見えるという技術がある。中も精巧に撮影し、すべての鉄道を保全することはできないが、その技術があれば、安価に一両ずつ保全できるという取り組みを実施しているため、ぜひ見に来ていただきたい。

一般のお客様が、ICTやARを方法論として知ってはいるが、やり方がわからないということがあると思っている、実感しているところ。いい技術を使って、デジタルで保全を進めても、一般のお客様がわかるようにするにはどうするかというところは課題だと感じている。

話は変わるが、各委員のご経験を聞いていると、会議体など、コンセンサスを図られたり、リーダーシップを取ったりする方が多いと思ったが、さいたま市の資源というと、コンセンサスを図ることが結構難しいと思っていた。ところが、私の子どもがある日、「どうしてさいたま

はダサいの」と聞いてきた。その話を妻にしたところ、年齢も違う一般のお母さんたちの中でも、みんななんとなく「さいたまはダサい」ということだけは、満場一致で感じていて、なかなかコンセンサスを図りづらい中で、こんなに一体感がある自虐というか、少し漫画チックだと思っていて、ユーモアがあるというか、そういう地元民の悲観的ではなく、少しユーモアがあって、みんななんとなくコンセンサスが図られているところで、これもとてもアートな体験なのだろうと思っていて、そういうことを逆手にとって、何かができればいいのではないかと思っている。

○村上委員長

すごく面白かった。

デジタル系の用語でいうとメタバースにどうやってつなげるかという話に結びつく。

芸能プロダクション会社と一緒に、ある会社が日本のお笑いを輸出するという事業を始めている。

これはとても大変で、英語が相当できても、現地に住まない限り、新聞に出ている漫画を理解することは難しく、言語や文化の壁は高い。それを越えようとするのは凄いことだ。

生活経験がないと、新聞に出ている漫画がちゃんとわかるようになるにはならない。だから、お笑いは最後に輸出されるものであって、日本人が英語でイギリスのユーモアがわかるためには、その前にある話がわからないといけない。そういう意味では、鉄道が真面目にどうやって動いているかだとか、あの列車は何時に来るかというのはまだユーモアの範囲には入っていないため、今の坪内委員のお話は、さいたまはなぜダサいのか？も、これがユーモアとうまく結びついてくるとメタバースと繋がり、メタバースに繋がるならば、それはデジタルでの活用を通じてさらにユーモアへとレトリックを発展させていくことになる。そういう意味では、さいたま市は鉄道博物館があるので、それを資源化したレトリックを考えていく良い機会が生まれる可能性についての話だった。

次に、公募委員の方。

○雑賀委員

人口減少というときに、人数をカウントすることも大事だと思うが、外国人が来てくれたときに、さいたま市の魅力、文化の視点で伝わるという話は、次のテーマであるのか。

○村上委員長

外国人に魅力の町“さいたま”というのは、実はこの文化ではなくて、それはおそらく観光の部署の担当だろう。ただし、観光の部署が人を呼ぼうとするときに、さいたまの魅力は何かと考えるのは、ここ文化やアートの部局がやらなければいけない。先ほど鉄道博物館が持っている鉄道経験の、メタバースの中に入れるか、動かすかという話は、うまくいけば完全に外国人にヒットする。その話のもとにあるのは、さいたま市にはどういったまちがあるかというところが重要で、そのためにはただ面白いだけではなく、行ったときに、親切とか魅力とかおいしいとか清潔とかそういう要素が必要。

外国人の観光客が来た時に、何か面白い経験をしたことはないか。

○雑賀委員

あまり知らない。

美術館に来る人たちは絵を専門に見に来る人たちなので、どつきり感というのはない。

○村上委員長
トイレを汚さなかったか。

○雑賀委員
わからない。

○村上委員長
入口のところで騒いでしまったとか。

○雑賀委員
特にない。
上野の美術館だったが、駅のところでは騒いでいる人がいるが、それは美術館の管轄外。
美術館は、モネを観に来るとか、特定の目的を持って観に来る人が中心。

○村上委員長
ここ5年くらいで、面白いアートな体験をしたことはあるか。
例えば、美術館を観た人たちが集まってこんな話をしていた、など。

○雑賀委員
特にない。

○村上委員長
日本の美術館を観に来る外国人というと、かなり玄人な人。そういう人たちが来るようになったこと自体がすごいことだと思う。

○雑賀委員
国際化ということで、キャプションや音声ガイドも英語だけではなく、全部4か国語対応になっている。

○村上委員長
ありがとうございました。
他にはどうか。

○嶋岡委員
一昨日、日本のデジタルトランスフォーメーションをどう進めていくかという研究会に参加し、そこでたまたま話題が挙がったのは、アメリカの大統領選挙や、兵庫県知事選挙など、全く予想と違う、かけ離れた結果になってしまったという話。
その時に話があったのは、今までは、アナログの世界とデジタルの世界を分けていたが、もうそんな時代ではないと。社会というのは、アナログ社会とネットの社会両方で成り立っている。デジタルではこうしようとかアナログ社会がこうしようとか、そういう発想をしていること自体が時代遅れで、これからはその両方を1つの社会として見て、社会といたらその両方をイメージして対応しなければ、世の中が予想できないし、ついていけないという結論になった。
そのため、こういう文化的施策についても、まずアナログで考えて、デジタル化をどうしよう

ではなく、全部まとめて一緒に考えていかないと、これからうまくいかないと思う。
例えば1つの例として、今ここで、魅力的な今後のコンテンツを考えるとしても、あまり効率的ではなくて、ネットの社会に行けば可能性を感じるものはいくらかでも転がっていて、先ほどインバウンドの話があったが、いまや海外の人は日本人も知らない、なんでこんなところに行って面白いのだろうというところに行っている。それも全部ネットの影響がもたらしているものとして注目されており、そういう意味ではこのネットも含めて1つの社会として考えて、いろいろな魅力的な商品などを考えていかないと、なかなか対応できないのではないかという気がする。

あともう1つ。音楽の活動をしているが、結構デジタル化されており、昔は譜面を皆で使うため、譜面係がいて、譜面を一元管理して、その人が全部手書きで書いて皆に配るということをやっていたが、今は全部デジタル化されている。

もちろん新しい譜面がデジタル化されているのは当然だが、古い昔の手書きの曲もあり、それは全部デジタル化しないといけないため、我々個人でデジタル化するソフトアプリを持っていて、デジタルに取り込んで、間違いを修正して、それをLINEで配布するというのを普通にやっている。もう今はアプリもすごくて、手書きの譜面をちゃんと全部読み込んで、もちろん音符が合っているのは当然で、フォルテだとかピアノだとか、そういう音楽記号をちゃんと認識して変換してくれる。

このように、一般社会、一般生活もデジタル化は相当進んでおり、先ほど言った世の中をネットとアナログ社会を1つとして見なければいけないという観点と同じように、そもそもデジタルは当たり前とその辺に転がっていることに気づくことが重要。そうしたことに取り組んでいかないといけないと感じた。

○村上委員長

何かいい例はないか。

○嶋岡委員

今、我々が音楽活動をするときに、当然だがリアルの世界で練習をする。

例えば、ピアノの場合、ピアノの先生のところに行って、こういうふうには弾くとか、テンポはこうだとかという指示を受ける。自宅に帰って、次のレッスンまでの1ヶ月間練習する間に、先生の指示は尊重するとして、さらに疑問に思ったときに、ネットの世界に行くと、ネットの世界にはピアノの先生がとてたたくさん居て、自分がこの曲を練習しているという、その曲の解釈や練習方法を教えてくれる先生がネット上にいくらかもいる。

その何人もの先生を見て、いい意見を取り入れて、自分の先生のをベースにして、デジタルの先生の意見を取り入れて、自分の先生に持っていく。こういうことを今は普通に行っている。

○村上委員長

それはすごく面白い。“お稽古のDX”と言われそうなものだ。中高の教員をしていたことがあるが、吹奏楽の場合、実際生徒たちは世界中からデータを集めて、それを生徒が解釈して、それを最終的に指導者の先生が直していくという状況であり、昔のように基礎から全部先生がやることはもはやない。

人口が減ってくるさいたま市、それから高齢者だけのさいたま市において、“楽器のお稽古”はとても必要なスキルと言える。

昔は町内にピアノの先生が1人2人いたが、どんどん減ってくるし、そもそも美術、音楽学校

の入校者が減っていて、今の美術は倍率が10倍くらい、昔は芸大の油絵で55倍ほどの時代があった。このように、やる人が減っていることが確かな状況の中でも、クラシックやモダンの音楽を続けようと思うと、デジタルは不可欠である。
つづいて、山口委員。

○山口委員

今いろいろお話を聞き、2点思ったことがある。

1つは、極めて具体的な話で、鉄道ファンとしての意見になってしまうが、さいたま市の文化、例えば盆栽とか漫画とか人形とかいろいろある中で、鉄道も挙げられているが、盆栽や漫画や人形については、さいたま市として1つになっているように見えるが、鉄道に関しては、そうは見えない感じがする。

やはり鉄道の話は大宮がメイン。さいたま市としてひとつになって20年経つことから、市として1つになって取り上げていってほしいと思う。

それからもう1点は、非常に抽象的なことだが、文化芸術と一口で言っても、果たして今持っている心の豊かさを、文化芸術を通していかに高めていくのかということが、どのようなものかというのを教えてほしい。

また、文化度が高い、という言い方や、芸術は芸術度が高いという言い方はないけれども、芸術的センスは増えている町だとかいう言い方はある

いわゆる文化度だとか、芸術度の高さというのは、何をもって高い低いとか、物差しは一体あるのだろうか、そのあたりをご教示いただきたい。

○村上委員長

ありがとうございました。

山口委員自身は、さいたま市の文化、或いは芸術についてどのように評価するか。

○山口委員

おそらく、文化度や芸術的センスは高いと思っている。

市民の活動として、いろいろなものをやりたいという意欲があったり、いろいろな発表をする場があったり、そういうところは、さいたま市というのは、おそらく恵まれていると思っている。

○村上委員長

ありがとうございます。

そもそも、大宮は比較的新しい町であって、鉄道の分岐ができるまでは、中山道の曲がったところにある氷川神社と門前集落などであり、そういう意味では、浦和は近代になって住宅街として開発され住んでいる人も増え商店街も発展した。蕨はさらに大きな町だった。

浦和にちょっとお金を持った人たちが住んでおり、第二次世界大戦前から住宅開発が行われて、その人たちの教養が高かったということはあるかもしれない。

例えば、埼玉大学があって、その附属の学校もあった。我々がこれから先を見たときに、この文化度や芸術度の高さというのは、こういう理由で引き継がれていくかもしれない。そして、こういう歴史だから気をつけないと危ないというポイントはあるかも知れない。

○山口委員

やはり東京に近すぎる。地理的な面で。

独自のものが、確立はするけれども、それが大きく発展するまでにはいかない可能性があるという気がする。

○村上委員長

それでは、どうすればいいと思うか。

東京への依存は、今後徐々に落ちていくかもしれない。サラリーマンが減っていくということもあって、東京への依存は少なくなっていく、さいたま市が独自性をもって継続していくというのは、比較的全国の中では高いと言われている。

だとすると、我々が文化とか、芸術とかというものを伝えながら、我々の生活を豊かにしていくための鍵、そういうものを今ご自身の生活の中で見えていたりしないか。

○山口委員

冒頭に申し上げたように、埼玉都民だったけれども、今は、この地元というのはすばらしいところだと様々な再発見をしている。

それを他の人たちにどうやって気づかせるかというのは、そんな特効薬があれば既に市としてはやっているだろうし、そんなに簡単に思いつくものではない。人から人へ伝えていく、原始的だが、私はそれを実践していくつもりでいる。

○村上委員長

ありがとうございます。

市の政策があって、その中に文化やアートな要素がいくつか提示されていて、鉄道、盆栽、それから人形といったものが掲げられているが、私の経験から言うと、徐々に生活の中からさいたま市の文化というのが、離れていっているような気がしている。

私が小さいころ、ほとんどの家の庭には盆栽があったし、みんなで機関区に遊びに行くというのが日常だった。その他にも、考えてみると、さいたま市の文化と言われるものが徐々に小さくなっていった。市民の生活文化が盆栽や鉄道あるいは人形から離れていってしまった気がする。しかし、今の山口委員のお話を聞いていると、それがどこかにはやっぱり残っていると感ずる方はおられると思うことができる。

例えば、新しい住宅街でもどこかの家では盆栽を育てている家が再び出てきていたりするのだろう。それから、どこかの家では今でもきちんと昔ながらの岩槻の雛人形が飾られているのだろう。しかし、そういう風景をみんなで共有していくという、その価値共創というか、そこを作ると言うことがすごく重要だと思う。

先ほどの新井委員のお話で出てきた岩槻の人形のような、新しい生活の中での文化の共有、それをどう使うかというのが非常に重要で、使うことによって、共創的にものをつくり出していく、そういう可能性というのがあれば、山口委員のおっしゃったような問題も解決していけるのかもしれない。

次に、村田委員。

○村田委員

大宮盆栽協同組合という立場から参加しているため、盆栽を通して出てきたアートというと、大宮盆栽美術館の駐車場の一部がさいたま国際芸術祭の会場の1つになったほか、館内の展示などで、現代芸術の作家の方と盆栽を取り合わせて展示するといった試みが最近あった。これはなかなか世界でも無いような、盆栽を単純にアートと言うのではなく、盆栽とその他のアートの組み合わせということが起こっていて、世界でも独自だと思うが、もう少しプレゼンスが

高まるというのと当事者としては感じている。

○村上委員長

ありがとうございました。今の話は先ほどの人形の話に近い。新旧2つのものがあって、融合により新しいものができていく話。

それでは次に、代田委員。

○代田委員

メディアが取り上げる際には、新しい気づきや発見がないかを大事にしていると思われる。デジタルという点で言うと、デジタル技術を使ってリアルに寄せていく方法が、一般の方への親和性が高いのではないか。例えば、美空ひばりさんをAIで甦らせて、姿と歌唱をデジタル技術を活用して蘇らせた番組があったが、大きな反響があった。このほか、ピカソのゲルニカを8Kの映像で撮って投影したりもしたが、8Kの映像のため、大きなゲルニカの絵の一部分にズームインしても鮮明に見ることができた。デジタル技術をリアルに寄せていくと、一般の方にも訴求できると感じている。また委員長から質問があった、さいたま市の課題について何か気づきがあるかという点について、私自身として、まさにアートやカルチャーと言うか、身体表現できる場がちょっと少ないと感じる。特に子どもとか若者が気軽に参加して、何か表現をする場が浦和駅や大宮駅、さいたま新都心駅といった公共のところで繰り広げられている場面に出くわすことが残念ながらあまりない。やはり都内では、いろいろなカルチャーの発信があるので、都市計画とセットで、そういった発信できるスペースがあるとよい。東京の真似をする必要はないと思うが、浦和や大宮が住みたいまちランキングで上位に入っていて、住みたいけれども、アートを発信する場になっているとまでは感じられない。都内ではなく、浦和や大宮で若い子どもたちが休日を含めて、カルチャーを発信できる観点で過ごせるようなまちづくり、このようなことがこれから必要なのではないかと、お話を聞いて思った。

○村上委員長

ありがとうございました。もう古い話になるが、四半世紀前にあった青文字赤文字というファッションの文化傾向の話があって、青文字でも赤文字でも、そのカルチャーをつくり出した人は誰だったかという、原宿から渋谷に集まっていた人たち。そういう意味では、片方は商業的に物を考え、もう片方は、行政がそれを規制する方向で動いていたが、若者たちが自分たちの物をつくり出す、価値共創であり、そこから共創をしながら新しい文化やアートが育まれていくという、それは日本では重要な場所だったと言える。なので、それがさいたま市にできるかと言われるととても難しい。でも一方で、さいたま市がとても面白いのは、ここは高校生がけんかする地域ではない。そういう意味では、おとなしいまち。だけど、これから東京との関係性は、デジタル化になっていくため、我々はどうやって価値共創を作り出していくのか、そこをやはり行政として考えるか、あるいは運動として、我々は創り出していくしかないような気がする。

次に、遠山委員。

○遠山委員

ありがとうございます。今最後に、運動としてどう作り上げていくかという所に非常に興味があった。確かにさいたま市は全国的にみると人口が極端にこれから減っていくわけではない中で、何が利点としてあるのか。芸術祭をやっているときから思っていた。生活都市における芸術祭は、私がディレクターをやったときのテーマ。生活と都市が密着している中で、それはあ

る種、アーティストだけではなく、市民の人たちも表現に積極的に携わっており、それらが活発している状態にあって、それはすごくいいことだと思う。その中で最近、自分がディレクターを務めて来年芸術祭を新たに立ち上げようとしている中で、心が動いたことの1つとして、アーティスト・イン・レジデンスというものがある。先週福井県で、全国のアーティスト・イン・レジデンスに携わる人たちが集まる大会があり、そこに台湾のアートNPO法人が来ていた。アジアでは、台湾のアーティスト・イン・レジデンス活動は非常に先進的で、日本と同じくらいの早さで始まっている。その代表理事が自分たちでやっていることとして、ネットワーク・プラットフォーム・コレクションボイスという3つの点を話していた。ネットワーク・プラットフォームについては、今日の話でも結構出ていて、芸術祭がプラットフォームになる可能性があるし、各施設・文化施設はそういう場になると思うが、台湾でいうコレクションボイスというのは、いろんな市民の声を集めて、自分たちがNPO法人として政府に届けると言っていた。そうなるともたちょっと違って、ある種、坪内委員が先ほど言っていた皮肉というか、ある種ユニークさというものも許容した声、真面目な声ではなくて。もちろん小さな声のビッグデータみたいなものがある可能性がさいたまにあると思ったのだが、それが運動として起きていって、その中にユニークさがあって、さいたまの独自性になるかなど、そういったことを考えさせられるし、とても面白かった。

先ほど高見澤委員は継承の難しさとおっしゃって、私も今準備している芸術祭では、振興ではなくて、継承だと言っていて、そのために学問を立ち上げようとしている。私は2020年の芸術祭のときに、さいたまスタディーズという、さいたまを深堀していく、何も無いさいたまを広げていくところにもいろいろなものがあるということを深堀していくために、さいたまスタディーズというものを継承した。今やろうとしていることがそれに近く、人口6,000人の山間部の小さなまちだが、そこはとても豊か。振興する必要はない。まちおこしをする必要もない。でもどのように継承されていくかが課題で、小国町という熊本の小さな町だが、北里柴三郎が生まれた町である。その町で、国際小国学という学問を立ち上げようとしている。それはアートだけではなく、文化人類学や哲学、教育。もちろんアートも入っているが、そういったものを町民とともに継承していく。どんどん人口が減っていくため、小学校や中学校において美術部がなくなってしまった。そういった時に、町の美術館が地域美術部を作る。その文化度の高さ低さというのも今日話が出たが、失われたものをもう一度作り上げること、これは文化度の高さを感ぜられる。なので、そのまちはやはり自分たちに無くなったものをもう一回取り戻して作ってしまう、そしてそれを町民がやっていく。アーティストが入ってきて何かをやる、すでにそこで起きている、すでにそこにあるものを再発見する。そういったものを集約していったら、国際小国学というものを立ち上げ、それを継承していくのだが、アーティスト・イン・レジデンスにそのヒントを得たのが、町が、県が、国外の人がその地域に来ることによって、我々が思いもつかない形で継承されていく。それはアーティストの面白さであり、力でもあるのだが、想像を超えた継承の形が世界に広がっていく、私はそれを期待している。町内における継承が町も地区もみずから継承していくのに限界がある中で、デジタル化という力も使えるところだと思い、そこも面白く感じている。

○村上委員長

ありがとうございました。

今の話の中で、台湾の事例が出た。台湾の政策決定のシステムでは、1人のリーダーを1人1票の選挙でリーダーを選んでいく選挙が存在する他に、いくつもの政策に対して、それぞれの選挙人がかなり多くの同一数の票を持ち、政策の重要度に合わせて持っている票を配分していく二次投票の方法が併用されている。二次投票では、政策に序列がつくほか、どの政策を誰が

やるかということが決まる。継承することと採用することを並列に議論しようとするには、有効な仕組みである。地方自治体の職員や町づくりをする人には当たり前の知識であるが、まだ日本ではあまり普及していない。なので、おそらくそれが普及してくれば政策にのせるものと、継承するとき一般の人たちがどう動くのかという話、さらにその中にデジタルをどう組み込むかというような話は、分かれているが俎上に上げて議論できるようになると思う。そうするとそれを基盤としてその上に文化や芸術をのせていくという作業をしなければならない。その辺りをおそらくこれから学ばなければならないと思う。

こちらのページ（「文化芸術都市創造計画施策一覧」）を見ていただきたい。

このページをご覧になって、今後こうした方が良い、ここが大切だと思うものがあれば意見を伺いたい。

○関井委員

アナログではあるがみんなの目に触れる機会が多いもの、例えばお話の中でビルの一面を画面にするというお話があった。先ほどのお話は要するに、部屋の中ではなく外に向かって情報を出せば、この家にはこういう人がいたという情報が伝えられる。様々なものがさいたま市の中に産物として眠っていると思うが、そういうものと日常的に触れる機会が少ないと思う。なので、そういったデジタルを活用していくことで、文化をもっと市民に浸透させ、興味をもってもらえるようになるのではないかと。このページで言うと、施策6に該当するかと思う。

○村上委員

今までの御意見をまとめていく。まず、

施策1：文化芸術都市の創造のために必要な文化芸術活動の促進。細分化してはいけない。いくつものものを融合していくイメージ。継承というものも、古いものと新しいものを融合する。今回いくつもの融合事例や方向性の提案が出た。

施策2：文化芸術に対する子どもの感性・創造性の醸成。これも大切。今回、表現機会の拡充などの案が出た。

施策3：伝統的・民俗的な文化芸術の継承と発展。今回、これに関して重要なのは継承の方法として、デジタルデータづくりの推進やDX推進の意見が出た。

施策4：文化芸術に対する理解や関心の促進。この話も今回いろいろ出たが、例えば小林委員からお話があった、自分が持っている資産（プロパティ）を継承して、展示機会の整備を拡充する活動などが出た。

施策5：地域に根ざした文化芸術に関する資源の発掘・保護・活用。これは実際には難しいこともある。デジタル化が進むと徐々に無くなってしまふとその特別感が薄くなってしまふ。文化施策というよりも、国でいうと総務省がやっている地域デジタル基盤活用推進事業がこの施策に該当してくるかも知れない。

施策6：多様な文化芸術に触れる機会の提供。さまざまな意見が出たが、新井委員から出た、そもそもはお雛様を作っている技術だが、それをほかの人形作りに活用することによって利用する人が増えたというもの（共創の可能性の拡大）。つまり、ユーザーとのコミュニケーションの場を創り出すことができるということが繋がるであろう。坪内委員のメタバースの話もこの施策に近いものがある。メタバースの中で我々はどう参加できるようにするのかという所を考えていく話だった。

施策7：文化芸術活動の場の充実。これも話が出た。施策6で見た芸術活動と触れ合う機会を増やす話や、関井委員からお話にあった芸術的創造性の向上であった。最後に、

施策8：多様な分野と文化芸術との有機的な連携。村田委員から出た、古いものと新しいもの

の組み合わせの話。また継承の組み合わせの話で言うと、高見澤委員から出た、資料はあるがどうすればよいか、それはデジタル化することでまとめられる話かもしれない。

以上で、意見交換会を終了する。ご協力に感謝を申し上げます。

(8) その他

事務局より報酬及び会議概要についての説明

(9) 閉会

さいたま市スポーツ文化局文化部文化政策室

電話 829-1225

FAX 829-1996